

ワークショップについて

【目的】

地域住民と専門職、お互いのできることを生かした連携の在り方を探り、重層的支援体制整備の方向性に反映させる。

(参考)

久留米市では、今年度から、重層的支援体制整備事業を実施しています。

この事業は、地域共生社会の実現に向け、本人や世帯の複雑化・複合化した地域生活課題に対応する包括的な支援体制を構築するため、「包括的相談支援」「参加支援」「地域づくりに向けた支援」を一体的に実施するものです。(参考資料3参照)

事業推進には、くるめ支え合うプランに示す「個別支援の成果や課題を活かした地域づくり 地域力強化による個別課題の早期発見・早期解決」(P24～参照)が重要であり、地域住民と専門職が連携し、個別支援と地域づくりを一体となって進めていく必要があると認識しています。

【テーマ】

個別の事例を題材に、次の2点について意見交換を行う。

(事例は裏面参照。事例は班ごとに割り振るので、検討するのは1事例です。)

- ①「専門職(業務)としてできること」「地域住民(個人の活動)としてできること」
- ②「お互いのできることを生かした連携方法」

※便宜上、委員の皆様を「専門職」と「地域住民」の立場に分け、両者の視点から考えます。

事例 1

【家族構成】

A（83 歳/女性）単身生活

【状況】

Aは、数年前から市営住宅で単身生活をしている。身寄りはいない。わずかな年金で生活しており、時々、以前住んでいた場所の友人などにお金を貸してもらえないか、相談することがある。また、同じ話を何回もする、鍵を頻繁になくす、通いなれた道なのに、道に迷うなどがあり、友人は心配している。友人は病院受診を勧めるが、なかなか受診しない。

Aは、数年前に転居してきたこともあり、近所づきあいはあまりない。民生委員が訪問しても、出てこられないことが多いが、道端で挨拶はする。

最近、Aの部屋の窓に虫が湧いていたり、ベランダにゴミ袋が山積みになっていたりするので、近隣住民が困っている。

事例 2

【家族構成】

A（14 歳/中 2/女性）、父（46 歳）、母（43 歳）、弟（4 歳）の 4 人家族

【状況】

Aの母は、弟の出産を機に体調を崩し、Aが家事や弟の世話をしていた。中学入学後は、部活をしたいと思っていたが、家族のことを助けないといけないという気持ちがあり、入部を断念。

母は体調が一層悪くなり、うつ病と診断、仕事を退職。退職後も気分が落ち込んだり、外出や家事などをすることが難しくなった。Aは、学校以外の時間は家事や弟の世話に追われるようになった。

父は、朝早くに家を出て、帰宅はほぼ毎日 23 時頃で、日をまたぐこともある。休日も出勤したり、接待などでほとんど家にいない。

弟の保育園への送迎は、同じ自治会内で一人暮らしをしている父方の祖母(78 歳)がしている。ある時、祖母が 1 週間入院することになり、Aは、弟の送迎と祖母の看病をするために学校を休んだ。学校は、この休みをきっかけに、Aが家族の世話をしていることがわかった。

祖母の元には、月に 1、2 回、民生委員の訪問があつている。以前、民生委員が訪問した際に、「息子は仕事が忙しそうで最近会えていない。嫁も体調を崩していて、孫たちのことも心配」とこぼしており、担当の民生委員はそのことが気になっていた。